

子供の命を守るということ

樋口 治男

たとえばあなたが公園のベンチに座っていたとします。あなたの前に二～三歳の子供が遊んでいます。あたりには子供の保護者らしい大人のすがたは見えません。その子供が突然立ち上がりどこかへ歩き出したら、あなたはそれを目で追うでしょう。さらにその子が公園から出て車通りの激しい道に出て行こうとしたら、あなたは追いかけ、必死にその子を止めようとするでしょう。それは当然の行動です。子供の一番近くにいる大人があなたなら、あなたはその子供の保護者なのです。そして全ての子供は全ての大人に助けられ守られる権利を持っています。全ての大人は自分の目の前にいる子供を助け守る義務を負っています。（これが子供の命を守る三原則です。）

これは人類が猿から人間になった時、そして子供を社会の中で育てると決めた時からの約束です。しかし時々その約束を忘れる大人がいるのです。

今も いじめが原因と思われる子供の自殺のニュースを耳にします。そのことを回りの大人たち、先生や教育委員会の人たちはどう思っているのでしょうか。「いじめがあったという事実は確認していない」こういった事件の時、よく聞かれる言葉です。しかし一番大事なはいじめがあったかどうかではないのです。一番大事なのは、その子供の命を守れなかったことです。目の前にいる、おそらく自分の命の危機を感じて悲鳴をあげていたはずの、子供の命を守るという人間の一番大事な義務を果たせなかった、大人としての痛烈な反省が まず必要なのです。

自分の命を自分で守る、その知恵と技を持った人間を大人と言います。教育は、子供たちにその知恵と技を身に付けさせるためにあるのです。そして子供たちが自分で自分の命を守る力をつけるその間は、回りの大人たちが子供達の命を守る必要があるのです。

自分が実際に子供の親になった時に思ったことがあります。親が子供にしてやるべきことは二つ、ご飯を食べさせてやることと、病気になった時に医者に連れていく、看病してやること、これだけです。それ以外のこと、しつけをする、勉強をさせる、一緒に遊ぶ、などはおまけです。その時はこの意味は分かりませんでした。それはつまり子供の命を守るということです。良い子に育てる、賢い子供にしたいなどは親の欲です。子供は結局自分で大きくなるのです。親はそれを見守るだけです。子供は親の思う通りには育たない、とは98パーセントの親は知っていることです。

世の中の物事は三つに分けられます。大事な事と、大事けれどもどっちでもいい事と、どうでもいい事です。子供の命を守るというのは大事な事です。しつけや「教育」（一般的に言う教育）はどっちでもいい事です。

学校の役割は、親に代わって、あるいは親と一緒に、子供を教育することです。それは子供が自分で自分の命を守る、その力を身に付けさせるための教育です。国語も算数も体育も、全ての勉強はこのためにあるのです（この原点が忘れられているように思います）。でもそれよりもっと大事なことは、やはり子供の命を守ってやることです。子供の命が危険にさらされている時には全力で守る、それが学校と教育委員会に社会から託されている一番大事な役割です。

小学校では道徳の時間が作られ、そこで命の大切さを子供に教えることが要請されているようです。しかし命の大切さは言葉で教えられることではありません。大人が行動で子供たちに教えるべきことです。回りの大人が皆自分を守ってくれることを実感できていれば、自分の命が、自分の存在が、この世で一番大事なものと、自然に、当たり前、疑い無く、信じる事ができるのです。そして自分の命の大切さを理解できれば、他の人の命も同じように大切であることが理解できるのです。

人権教育、これは子供に教えておくべき、とても大切な教育です。なぜなら基本的人権は自分の命を守るためにはとても大切な道具、強力な武器となるからです。自分が今置かれている状況は、自分の命を、自分の生活を、自分の人生を守れない、そう主張出来ること、悲鳴をあげること、助けを求めること、そしてそれを回りの人が認めること、それが基本的人権です。しかしここでも多くの方が人権教育について勘違いしているのではないかと思います。人権教育が目指すべきは、他人の人権に心を配る優しい心、ではなく、自分の人権をきちんと主張できる強い心なのです。この強い心を持ってこそ、自分の命を自分で守ることができる大人になれるのです。

自分の命を自分で守る、その知恵と技を持った人間を大人と言います。その知恵と技は、他の人間の命を守るために使うことができます。その力を使って他の人の命を守れる人を大人と言います（だから、子供の親になれるのです）。その力を使って子供の命を守ることが、全ての大人の義務なのです。

あの東北の震災と津波から七年が経ちました。あの時われわれは、テレビや報道を通じてではありますが、さまざまなドラマを見ました（申し訳ないことですが、われわれが見た一連の出来事は、テレビの向こう側で起きているドラマとして見ていたとしか言いようがないのです。しかしそこからいくつかの教訓を得ることができました）。

その中でわたしが一番感動した、良かったなあと思ったのがある保育園か幼稚園についての話です（一回しか聞かなかったので場所や詳しいことはわかりません。

仮に保育園とすることにしておきます)。その保育園では災害時の一次避難所を、自治体の指定避難所ではなく、近くのコンビニの駐車場と決めていました。子供達を連れて避難していると近くの商店や工場から大人達も集まってきました(子供達が集まっているというのはそれだけで気になるものです)。そこへ津波警報が鳴ります。そこで(保育士さんだけでは手が足りない)たまたまそこに集まっていた大人たち皆で園児を一人ずつ背負って夢中で山を駆け上ったのです。そして園児は全員助かりました。

あの日は寒い日でした。子供の体温は大人の体温より少し高いので子供を背負うと背中がほくほくと暖かくなります。ひょっとしたら名前も知らない子供を背負って必死に山道を登った人たちは、その背中の中の温もりを忘れることができないでしょう。だって見知らぬ子供の命を自分の手で、自分の背中で救うことができるなんて、人間にとって、大人としての最高の喜びなんですから。その後その人がどんな人生を送ったとしても、死んだ時、閻魔さまはこの一点だけで極楽行きを許可してくれる、そう思います。

子供たちが皆助かったということは、その子供を背負って逃げた大人も全員助かったということです。大人は要らないことを考えます。財布忘れたとか、携帯忘れたとか、上着着てきたらよかったとか。やっぱり取りに帰ろうか、とか。しかし目の前の子供の命を救うことに比べたら、その他のことはどうでも良いことです。誰だって、文字通り必死になります。ひょっとしたら上着を取りに帰って津波に巻き込まれた人がいたかも知れません。だから、子供が大人を救った、とも言えます。子供の力です。

これと反対の事象と私には見えるのが、あの石巻の、津波に向かって行った(としか思えない)幼稚園バスの悲劇です。その幼稚園は高台にあったので結果的には津波の被害は免れたのですが、地震の後園児を帰宅させるべくバスを走らせたのです。すでに津波から逃れようと園のある高台に避難してくる人がいるなか、バスはそれに逆らうように海岸に向かって走ります。途中何人か園児を下ろし、幼稚園の方向に戻ろうとしたその時津波に巻き込まれ、残っていた園児五人が犠牲になりました。なぜ園児を帰そうとしたのでしょうか。園長さん、あるいはバスの運転手さんでもいいのです。この子供たちは自分が守る、その決意があれば事態は変わっていたでしょう。あの地震の後です。園児の家が無事かどうか分かりません。親がちゃんと子供を迎えてくれるかも分かりません。園児を返すよりこのまま園で保護した方が子供を守ることになる、そうは考えなかったのでしょうか。もちろんあの幼稚園の園長先生や職員にその気持ちがなかったとは思いません。しかし大人は色々要らないことを考えます。子供たちが不安になっている、早く親元に返した方がよい。そんな言い訳の裏に、少しでも早く自分達の責任を逃れたい、その気持ちの方が大きくなったとは言えないでしょうか。

津波警報が出ているかどうかにかかわらず、大きな地震の後には津波が来る（かもしれない）のは、三陸だけでなく、海沿いの地区では当然考えて置くべきことです。幼稚園は高台にあります。園児の家は海岸沿いにあります。ならば、事態が落ち着くまで、園児の家や街の状況が確認できるまで、そして津波の危険が無くなるまで、たとえ親から要請があっても、帰宅させるより子供の命は園で守る、それぐらいの強い意思があって欲しい、と思います。

人の命に軽重はない、と言われますがそうでしょうか。やっぱり、子供の命は大人の三倍重い、そして申し訳ないですが、年寄りのその十倍重い、そう思います。しかしそれだけではない、と思えることもありました。ある老人養護施設での出来事です。九十才のおばあさんの車椅子を十九才の職員が押して避難しようとしていた時に津波に襲われました。腰まで津波につかり十九才のその職員もいっしょに流されそうになります。しかし「この手を離したら一生後悔する」必死、です。そしてなんとか津波から逃れることができました。でもその男の子に（男の子と言ってしまいます）言ってやりたい、君の命はそのおばあさんの命よりずっと大事だよ。だって今助けたとしても、二三年後、ひょっとしたら一年後にはその命は消えているかもしれ知らないんだよ。それより君の命の方がずっとずっと大事だよ。しかし、年寄りの命と生活を守ることを職業として、使命として自分で選んだのです。それは自分の命を懸けてでも守るべきものなのです。その命を助けることができたことは彼の一生の宝であり、もし助けられなかったとしても、その後悔も一生の宝となったでしょう。また本当におばあさんが一年後に亡くなったとしたら、その時は心からの悲しみの涙で見送ることができたでしょう（また彼自身が死ぬときも、もちろん閻魔さまは極楽へ送ってくれるはずです）。

[あの大川小学校のことは本当は考えたくありません。が、一点だけ。あの小学校に地元出身の先生は何人いたのでしょうか。三陸は何度も大津波に襲われていきます。その記憶と教訓は代々、知らず知らずのうちに伝わっているはずですが。実際地震の後校庭に避難している間、児童の中で山に逃げようと言った子供がいたそうです。しかし先生方はその決断ができず、三十分余り無駄な時間を費やしたのです。もし三陸で生まれ育った先生が何人かいたら（一人では弱い）、速やかにその決断ができたのではないのでしょうか（実際に地元出身の先生がいたかどうか、確認はできません。想像です。しかし確信的な想像です）。行政のハザードマップで津波の危険地域に指定されていなかったとか、市の広報車の音が聞こえたかどうかとかの問題ではないのです。その瞬間に自分の命を守るために、あるいは目の前の子供の命を救うためにどうしたらよいか、その決断と行動ができるかどうか、なのです。

小学校あるいは中学校では地元出身の先生の存在はとても大切です。今各学校では地域とのつながりを大切にしたり、地域学習に積極的に取り組む所が増えているようです。しかしそこにその地域で生まれ育った先生がいたら、その教育の内容が

もっと実のあるものになるでしょう。制度として、地元出身の先生を複数あるいは一定割合配置するようにして欲しいと思います。]

もう一つ忘れてならないのは、「釜石の奇跡」と言われた釜石市の小中学生の行動です。その一つ釜石東中学校では、地震の後校庭に避難している生徒達に校舎の中から先生が叫びます。「とにかく走れ!」この先生が素晴らしいです。釜石ではその前から津波教育が実践されてきました。それは生徒児童への教育であると同時に先生方への教育でもあります。教師は一般的に統率を好みます。子供達をクラスごとに整列させて、その列のまま次の行動をさせようとしています。津波の避難はそうではないのです。とにかくバラバラに逃げろ、「津波てんでんこ」です。そして「率先的避難者となれ」一人が走ると他の人もつられて走ります。子供が「逃げよう」と叫んで走れば大人も一緒に走ります。子供にはその力があります。

中学生達は避難の途中で小学生と合流します。小学生の手をとり一緒に逃げます。「助けられるより助ける人になろう」自分の命を守れる人は他人の命を守ることができます。中学生にもその力があるのです。それまでに小中合同の避難訓練も実施されていたといいます。その実践的訓練があったればこそまさに本番、あの大地震の後でも慌てること無く、臆すること無く、当たり前のように、小学生の手をとって走ることができたのです。

中学生と小学生は一次避難の場所と指定されたグループホームにたどり着きます。その背後の土手が崩れているのを見て一人が叫びます。「もっと遠くまで逃げよう。」ハザードマップではそのグループホームまでは津波は来ないとされています。しかし「想定を信じるな」「その時の最善を考えよう」、釜石の津波教育はそう教えます。声につられ皆で再び走り出します。はたして、「想定外の」津波はグループホームを飲み込みました。さらに、子供達が走り出したのを見て、ホームの職員は入居者を二階さらには三階まで移動させ、難を逃れることができました。やはり「子供の力」です。

釜石以外の中学生ならこの場合どうするでしょう。ほとんどは一次避難所までたどり着いたところで止まるでしょう。「だって先生がそう決めたんだから」「そこまで津波が来たのなら先生が悪いんだろ」自分の命が危機にさらされているのに他人のせいにしてもなんにもなりません。自分の命は自分で守るのです。その力を自分につけるためにさっきの二つの教えがあるのです。最善の道を探すのです。止まってはいけないのです。

子供達は次の目標とした老人養護施設、さらにもうそれ以上は行けないという山際まで走り抜け、そこで眼下に、迫り来る津波の脅威を目にすることになるのです。

小学校の中には既に児童を下校させていた学校もありました。三月、学期末です。そして、下校し自宅にいた児童もほぼ全員が避難し助かったと言います（避難

した、あるいは避難しようとした、という点では100パーセントと聞きました)。釜石の津波教育がどれだけ徹底していたかがうかがえます。

子供に聞きます。「君が一人で家にいるとき地震があったら、その後君はどうする？避難する？」「親が帰るのを待ちます」あるいは「お母さんに電話する。」「だけど君が避難していないのがわかったら、お母さんは必ず、君を探しに帰ってくるよ。その時津波が襲ってきたら、助かったはずのお母さんの命まで奪うことになるよ」「……」、そこから津波の勉強が始まります。歴史を知り、危険を学び、避難場所を調べ、そこまでの避難経路を何回も歩き、そして最後には「ぼくは一人でも絶対に避難するから、お母さんはぼくのことを心配しないで一人で安全なところへ逃げて」そう言えるようになるのです。

私はこんなに説得力のある言葉を、今まで聞いたことが無いように思います。こうして絶対とも言える行動指針を一つ得た子供は、自分の命を自分で守れることを知り、地震・津波のことだけでなくいろんな場面で積極的な「学び」ができるようになるのです。

この釜石の例とどうしても対比して考えてしまうのが、あの韓国のセウォル号の沈没事故のことです。今にも沈もうとしている船の中で高校生達は何をしていたか、覚えていますか。多くが携帯で親に電話していたのです。何を言いたかったのでしょうか。親に何を言って欲しかったのでしょうか。

船は既に傾き、今にも沈没しかけていることは分かります。命の危機が迫っていることはなんとなく分かります。しかし、船内放送はその場に留まれと言っています。だけど、逃げる方が、海に飛び込む方が良いかもしれない、しかしその決断ができないのです。放送に逆らってまで決断をする、その力が無いのです。自分の命を守るための決断です。それを親に言って欲しかったのです。頼るのは船内放送です。それに逆らいくつがえすのは、親の「逃げろ、海に飛び込め」という一言です。

セウォル号が沈んだのは海岸からそう遠くない海域でした。沈没の瞬間にはすでに海洋警察や近くの漁船などが救助に集まっていました。潮流が速い海域だったようですが漁民は潮の流れについては熟知しているはずですが、だから海に飛び込み浮いてさえいれば、必ず助けてもらえるはずですが。しかし……

しかし、韓国で泳げる人の割合は日本より少ないと言います。船に乗った経験のある人も、日本より少ないと思われれます。そんな親に、（高校生は「どうしたらいい？海に飛び込んだ方がいい？」という言葉さえ言えなかったかもしれない）、状況も分からないまま、「飛び込め」の一言を言わせるのは酷でしょう。それは自分で、自分の命を守るため、決断しなければならぬことなのです。そして高校生達はどこからも来るはずのない「指示」を待ったまま、そのまま船内に留まり続けたのです。

高校生になっても、自分の命を守るための決断が、誰かに言ってもらわないとできないのです。そこに今の韓国の危機を感じます。

しかしひるがえって日本の、「釜石以外の」高校生や中学生にその決断ができますか？ 自分の命を自分で守る、その決断と行動ができるでしょうか、不安です。これは中高生に聞いているのではありません。その先生方に聞いています。あなたが教える生徒は、自分の命を自分で守るその力を着実につけている、そう言えますか？ 学校は、勉強は、そのためにあるのです。国語も数学も英語も、そのためにあるのです。そう心得て生徒を教えていますか？

この問いはまた、すぐ自分に返ってきます。あなたの子供はその力を持っていますか？ いつでも自分の命を自分で守れますか？ そのための「子育て」ができていますか？ 自信はありません。不安です。ただ、そうであることを願うばかりです。

[東北の震災については（一部後から調べた部分もありますが）、多くは当時の報道の記憶、印象（と想像）に基づいています。記憶違い、事実誤認もあるかもしれません。ご承知下さい。]